

## ブロッコリーにもいろいろある

阿久津 友嗣

春本番。土曜の昼、家にいる。土曜の昼はこのところずっとパスタをつくるのが恒例になっている。土曜という、平日の5日間が終わって、ちょっと一段落して、しかも明日も日曜なので気持的にリラックスした日の昼時。もしかすると一週間で一番好きな時間なのかも知れない。こういうときにはパスタが一番（個人的にです）合う。いろんなパスタのメニューから、今日は春らしく菜の花のペペロンチーノをつくることにした。もちろんそう、ランチピアと、この気分に対応しい音楽は必需品である。手持ちのCDの入っているラックを探して、レッド・ガーランドのピアノ・トリオを見つけ、缶ビールのプルタブを開けグラスに注ぎ、アルミ鍋でお湯を沸かす。

そしてレッド・ガーランドを選んで正解だったとすぐに気づく。

「RED GARLND'S PIANO」。昼間に聴くジャズは、重すぎないのになにより重要だ。管楽器より、ピアノ系がどうしても合ってくるので、いつもはビル・エヴァンスが料理のお供なのだが、たまたま目に留まったレッド・ガーランドがこんなに合うのが少々意外だった。

お湯が沸いたところで、昨日コープの宅配で届いたブロッコリーのパック詰めを湯がいてストックしようと封を開けると、あれ？ ブロッコリーっていろんな形があるんですね。普通は、根元の茎からいくつかの枝葉に別れ、その先端におなじみのブロッコリー君たちがところ狭しと肩寄せ（ブロッコリーに肩があればですが）合っているのに、今日のブロッコリーはまるで握りこぶしのように茎から先がひと塊になっている。考えてみれば、ブロッコリーに限らず何だって一筋

縄なものなんてないわけで、勝手にこちらの都合で、ブロッコリーってこうだよねって決めつけているわけで、ブロッコリーにとっては大いに迷惑だったかも知れません。ひと塊の初めて見るブロッコリー君を慎重に包丁で解体してアルミ鍋に入れ、キッチンタイマーを3分に合わせます。

ここでふと建築のことを思う…。このような素敵な瞬間、音楽とビールの酔いも手伝っているかも知れないが、建築にも確かにありますね。こんな建築に出会って幸せだなと思うこと。もしかすると、料理も、音楽も、建築も、味わう喜びという点においては根っここのところで同じなのかも知れません。唐突に訪れる一瞬の幸福感。いい建築に出会う喜び…。

フライパンに、ニンニクと鷹の爪、そしてベーコンを入れ焦げ目がつく程度炒め、菜の花を加え——冷蔵庫にしらすがあったのでこれもいっしょに——、塩、コショウで味を調える。あなたは一番好きな建築は何ですか？ という問いに答えられますか。いい建築はたくさん経験しているでしょうが、ひとつを選べと言われて即答できるでしょうか。無人島にひとつだけ持っていくなら…の問いに似ています。若い頃（何十年前か前）なら若さに任せて即答できたかも知れませんが、還暦をすぎた今では無理。でも誤解を恐れずに言ってしまえば、その瞬間、今この時がいい時間だと思えるのが、いい建築、いい音楽、いい料理の条件なのではないでしょうか。

そろそろパスタを茹でる時間。大鍋にお湯を沸かし少し濃い目の塩を入れてパスタを茹でる。そして、先ほどのフライパンにお玉一杯のパスタの茹で汁を加えてひと煮たちさせパスタソースをつくる。レッド・ガーランドが終わったので、今日の気分でビル・エヴァンスでなく、チック・コリアの「ナウ・ヒー・シングス・ナウ・ヒー・ソブズ」をかける。彼にとっての初期のピアノ・トリオ（1968年）で、エレクトリック・ジャズの先駆けとなった代表作「リターン・トゥ・フォーエヴァー」もよく聴くが、知的でリリカルなアコースティック・ピアノによるこのアルバムも、すべてのピアノ・トリオの中で3本の指に入るほど好きである。

そう…、3本の指といえば、建築もなんとか3つなら選べそうです。パスタの茹で時間を気にしつつ、これまで訪れた建築からあれこれ考えてみる。そしてまず思いついたのは、韓国、良洞村（ヤンドンマウル）にある観稼亭（ガンガジョン）。ここへは2度訪れているが、日本と同じ木造でありながら、こんなにも厳格な構成美（儒教的禁欲性だ）を持つ建築があることにまず驚いた。コートハウスであるにもかかわらず、ちゃんと視線の抜けも用意されていて、屋外と半屋外が有機的、重層的に結びついている。最初に訪れた30年前、あまりの感激に誰もいない舎廊マル（当時はまだ上がることができた）に上がり、時のたつのも忘れひとり幸福感に浸った…。

パスタは、茹で時間より1分前に取り出し、フライパンに入れ火にかけ1分間パスタソースと絡める。たまたま、妻の実家の畑からとってきた柚子があったので、これも刻んでパスタに加えましょう。

2つ目の建築は、いろいろ迷うがここは王道、ル・コルビュジエを入れたいと思う。やはりコルビュジエは外せませんね。さあ、どの作品にしますか？ 数ある名作の中からサヴォア邸を選ぶ。サヴォア邸のようにその建築ができる前と後で、時代風景すら変えてしまうような作品——ビートルズの「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」がそうだったように——ってそうそうあるものではない。建築に限らず、芸術作品は時間の経過によって淘汰されるもの。サヴォア邸は今年がちょうど築90年だが、その存在価値は全く色褪せることはない。今、建築を考える上でのベンチマークとして、これ以上のインパクトのある作品はまだ現れてないと思う。

2本目のビールのプルタブが開きます。チック・コリアもそれ以前のジャズにはない、新しくスリリングなフレーズを奏でています。さあ、パスタができました。先ほど茹でたブロッコリーもトッピングに加えます。

建築3作品目はさらに悩む。悩んだ末、建築単体ではなく、世界各地で出会った「集落」から選ぼうと思う。建築単体の場合、その価値は普通その建築自体の中に含まれると考えられる。しかしそれだけだろうか。実はその建築に対して「いい」とか「よくない」とかの判断は、建築側ではなく、鑑賞者が決めているのである。どんなに「いい」建築であったとしても、感じる側が「よくない」と切り捨ててしまえば、それは「よくない」建築になる。つまり「いい」建築を決める条件とは、その作品の質だけでなく、受け手側の感性も非常に重要なのである。そしてこのことから考えれば、受けて側の感性がちゃん

としていれば、鑑賞者側から逆に作品を生み出すことも可能になってくる。大文字の建築（芸術）作品でなくとも、ありふれた街角や、些細な日々の日常の中においてでさえも、その人なりのマイ作品、マイ芸術を見つけることができるのだ。そういうことを気づかせてくれたのが集落だった。さあ、ではどの集落を選ぼうか…。

チック・コリアが終わる。先ほどの問い、無人島に…ですが、好きなCD 1枚となれば、これはもう決まっています。言い換えれば、これまでに一番数多く聴いたアルバム、それはキース・ジャレットの「ケルン・コンサート (The Köln Concert)」だ。最初に聴いた（もちろんLPレコードでだ）のは、高校か大学に入ったころだったろうか。当時はちょっとした街にはまだジャズ喫茶があって、一杯のコーヒーでむずかしげな文庫本を片手に何時間も粘るのが「ジャズ喫茶の正しいすごし方」だった。しかし記憶ではジャズ喫茶でありキース・ジャレットはかかかってなかったと思う。どこで出会ったか？ それが今となっては全く思い出せないが、大学時代から今日に至るまでずっと「ケルン・コンサート」を聴き続けていることだけは確かだ。このキース・ジャレットによるライブ録音盤は、全編ピアノ・ソロによる即興演奏で、ジャズやクラシックという音楽の垣根を越え、様々な音楽の断片が即興的、連続的に繰り出される。その恍惚感に満ちあふれた音の洪水により、聴き手も精神的な高みへと導かれていく…。

そうだ、思い出した。クラシックだったらもうひとりよく聴いたピアニストがいた。それはグレン・グールド。グールドもキースと同じくらいよく聴いた。グールドはこれまでの演奏スタイルとは異なる刺激的な

演奏でバッハを再解釈した。デビュー作であるゴールドベルク変奏曲（1956年）——映画「羊たちの沈黙」でレクター博士が刑務所の独房でカセットテープでかけている——を初めて聴いたときの衝撃は今でも忘れられない。このふたりには、演奏中にメロディーを裏声で口ずさむことと、ピアノを弾く姿勢が悪いというあまり褒められない共通点があるが、それはさておき、ジャズはとか、クラシックはとか、音楽の枠に縛られず、既成概念にとらわれることなく自分の信念を貫くところも共通点で、僕はこのふたりから大きな影響を受けた。そのせいかわからないが、既成概念にとらわれないというところは僕の性癖になって、たぶんそれは今も変わっていない。

久々に「ケルン・コンサート」をCDデッキに入れる。「タンタァターターン…」と演奏時間 26 分の第一曲目の聴きなれた最初のフレーズが始まる。でも無人島に「ケルン・コンサート」を持って行っても、どうやってかけるのだろうか？

さて集落。24 歳から 25 歳にかけて、ヨーロッパの建築をみるため僕は約 1 年間旅をした。そこで様々な集落に出会う。サン・ジミニアーノ、アッシジ、アルベロベッロなどのイタリアの中世山岳都市や、真っ白な角砂糖を散りばめたようなギリシャ、エーゲ海にあるミコノス島の集落など、この旅では数多くの集落が僕を魅了した。集落に出会う前は、純粹に建築を単体として鑑賞（そう、絵画と同じように）してきた。しかし集落を訪れてわかったのは、集落の場合、建築や空間体験だけでもそれなりに魅力的であるが、そこに人々の様々な生活シーン（洗濯物だったり、市場だったり、カードに興じる男たちだっ

たり…) が加わることで魅力が2倍にも3倍にも増すということだった。そのことを、最も強烈な印象を持って教えてくれたのが、ヨーロッパのついでに立ち寄ったアフリカ、モロッコにあるマラケシュである。マラケシュには迷路のような路地が密集するメディナ（旧市街）があり、その中心に、かの悪名高い(?) ジャマエルフナ広場がある。この広場には昼は蛇使いや大道芸人や水売りなど多種多様な人々が集まり、夜は夜で、怪しげな屋台がいくつも繰り出しどこの店からともなく呼び込みの声がかかる。メディナの細路地のエキゾチックな空間的魅力と、広場の群衆からマグマのように湧き起こる巨大な熱量との融合、あるいはその対立。このマラケシュの地で観たカオスの情景は、40年近く経った今でも、アフリカの太陽のように強く僕の心に焼きついて離れない。

僕は思うのだが、建築とは一言で言うと「構築する意思」ではないだろうか。それは、その性格上、必然的に純粹さ、よりピュアなものを求めていく傾向（バッハの器楽曲もそうだ）があり、それに対して、集落では、純粹さの対局にある雑多性や混乱が加わることになる。集落ではそれら不純物を容認することで、いや、むしろそれらを積極的に取り込むことによって、より魅力的なものになっていく。建築と集落、言い換えて前者を秩序（system）や理性（reason）という言葉にたとえるなら、後者は人間が生まれたときから持ち続けている気まぐれさや本能（instinct）とすることができるだろう。このふたつは本質的に交じり合わないものであるにもかかわらず、むしろ二律背反的であるからこそ——パスタソースが、オイルと水分が交わることで旨みが増すように——、どちらも重要で不可欠な要素なのだ。どち

らか一方のみでは、気の抜けたサイダーのように魅力が半減するのである。そして振り返れば僕自身はずっと、この2つの間を行き来し、あるいは揺れ動き、この2つの距離を見つめながら、悩みながら、これまで設計をしてきた気がする。ということで、建築3つ目はマラケシュ（集落）です。

菜の花のペペロンチーノ美味しいですね。ブロッコリーも彩りにぴったりです。パスタというとトマトソースをすぐ思いつきますが、あっさりした塩味のソースもいいですね。菜の花のほろ苦さと絶妙に合います。

キース・ジャレットの「ケルン・コンサート」第一曲目はラストに近づき、何度も同じパッセージを繰り返している。そして、ふと、ピアノの音が止む。その瞬間、会場であるケルン・オペラハウスの観客には演奏が終わったことはまだわからない。そして、わずかに間をおいてようやく大きな拍手が沸き起こる。いい音楽、美味しい食事（加えてお酒も）、そしていい建築（こちらは必然的に旅が付随する）がある。

ブロッコリーもそうだったように、音楽も食事も建築もいろいろありますが、いいもの、いや、いいと思えるもの（もちろんそれは個人の主観に頼らざるをえないものですが）に出会うことは至上の喜びです。「いい」には、規則も模範も、貧富による格差も、気づかひも付度ありません。ただ純粹に「いい」とあなたが思えることがここでは重要です。この土曜の昼下がりのように…。